日本自閉スペクトラム学会

第 23 回研究大会プログラム

共生社会を目指して

―自閉スペクトラム児･者の支援における多職種連携―

2025 年 8 月 30 日(土)・31 日(日)

福岡国際会議場

（福岡県福岡市博多区石城町 2－1）

目　次

大会日程 ……3－4

大会参加者へのご案内 ……5～6

自主シンポジウム関係者へのご案内 ……7

ポスター発表者へのご案内 ……7

大会基調講演 ……8

大会企画教育講演 ……9～11

大会企画実践報告 ……12

自主シンポジウム ……13～14

ポスター発表 ……15～19

大会日程

8 月 30 日(土)

12:00～　　受付開始

13:00～13:15　開会あいさつ

13:30～14:30
大会企画　基調講演(オンデマンド配信あり)
「自閉スペクトラム児への療育・教育の方向性」
　　本田　秀夫(信州大学医学部/日本自閉スペクトラム学会会長)

14:45～15:45
大会企画　教育講演1(オンデマンド配信あり)
「発達障害への支援　―これまでとこれから―」
　　市川　宏伸(日本自閉スペクトラム学会前会長/一般社団法人日本自閉症協会会長)

15:00～16：30　自主シンポジウム①

16:00～17:00
大会企画　教育講演2(オンデマンド配信あり)
「福祉分野における自閉スペクトラム児・者への支援　―全日本自閉症支援者協会の取り組み―」
　　近藤　裕彦(あさけ学園施設長/日本自閉スペクトラム学会評議員)

18:00～20:00　懇親会(1F レストランにて)

8 月 31 日(日)

9:30～10:30
大会企画　教育講演3(オンデマンド配信あり)
「高等教育機関における発達障害学生の支援
　―インクルーシブキャンパスに向けた多職種連携、そして新たな価値の創出へ―」
　　田中　真理(九州大学人間環境学府教授)

9:30～11:00　自主シンポジウム②③

10:45～11:45 大会企画　実践報告(オンデマンド配信あり)
「特定分野に特異な才能を持つ ASD 児の新しい教育を目指して―SEISA アカデミーの取り組み―」
　　松本　幸広(星槎大学客員教授、星槎アカデミー/日本自閉スペクトラム学会理事)

10:00～14:00　ポスター発表

11:45～12:15　会員集会

13:15～14:45　自主シンポジウム④⑤⑥

15:00～15:10　閉会あいさつ

時間	8月30日(土)		8月31日(日)			
8:30			8:30～ 受付開始【2F ロビー】			
9:30			9:30～10:30 教育講演3【203】 講師:田中真理	9:30～11:00 自主シンポジウム② 【204】	9:30～11:00 自主シンポジウム③ 【402+403】	
10:00						10:00～ 14:00 ポスター発表 【201】 在席時間: 奇数:11～12 偶数:13～14
30	10:30～11:00 資格認定委員会【402+403】					
11:00	11:00～12:00 理事会・評議員会【402+403】		10:45～11:45 大会企画実践報告 【203】 講師:松本幸広			
30			11:45～12:15 会員集会【203】			
12:00	12:00～ 受付開始【2F ロビー】					
30						
13:00	13:00～13:15 開会行事【203+204】 学会理事長挨拶・大会会長挨拶・事務連絡		13:15～14:45 自主シンポジウム④ 【203】	13:15～14:45 自主シンポジウム⑤ 【204】	13:15～14:45 自主シンポジウム⑥ 【402+403】	
30	13:30～14:30 基調講演【203+204】 講演:本田秀夫					
14:00						
30						
	14:45～15:45 教育講演 1 【203+204】 講演:市川宏伸					
15:00		15:00～16:30 自主シンポジウム① 【402+403】	15:00～閉会行事 【203】			
30						
16:00	16:00～17:00 教育講演 2 【203+204】 講演:近藤裕彦		16:00 クローク終了			
30						
17:30	17:30～18:00【1F レストラン SONES】 懇親会受付 18:00 クローク終了					
18:00	18:00～20:00【1F レストラン SONES】 懇親会					

大会参加者へのご案内

1. 会　場

・ 会場は福岡国際会議場の 2 階、4 階を使用します。
・ 受付は、2階のロビーで行います。
・ 開会/閉会行事、基調講演、教育講演、大会企画実践報告、会員集会は 2 階多目的ホール【203（+204）】で行います。ポスター発表は2階【201】、自主シンポジウム②④⑤は2階、①③⑥は 4 階で行います。懇親会は、1 階のレストラン「SONES」にて行います。
・ 館内は全て禁煙です。喫煙は、2 階のデッキにある所定の場所でお願いします。
・ 大会で使用している多目的ホール、会議室以外の会議室には立ち入らないようお願いします。
・ 大会で使用している多目的ホール、会議室は飲食可となっております。
・ ごみ類は原則各自でお持ち帰りください。ご協力をよろしくお願い致します。

2. 受　付

・ 第 1 日目（8/30 土）、第 2 日目（8/31 日）とも、受付は2階ロビーで行います。1 日目は12：00 から、2 日目は 8：30 からの受付になります。
・ 受付デスクでネームプレート等をお受け取りください。ネームプレートには氏名・所属をご記入になり、大会期間中、見やすい所にお付けください。
・ 必ず前もって学会ホームページからお申し込みと支払いを済ませてください。難しい場合は、当日受付にて現金での参加費支払いも可能です。

3. 費　用

会員種別	事前参加費（4/21～8/18）	通常参加費（8/25～10/24）
正会員	7,000 円	9,000 円
学生会員	3,500 円	5,000 円
当事者会員	3,500 円	5,000 円
非会員	11,000 円	13,000 円
懇親会費（希望者）	5,000 円	5,000 円

・ お申し込み後はクレジットカード払いにて参加費を納入してください。納入を完了された方には「登録完了通知」のメールが届きます。ホームページの参加申込システムより会員番号・パスワードを入力してログインすると領収書の発行を受けることができます。
・ 参加費を納入された方全員に、9 月にメールにてオンデマンド視聴のご案内をお送りいたします。メールを受信したら速やかに参加証をダウンロードして保存してください。

4. 大会参加証について

・ 参加証の発行は、オンデマンド公開終了後 11 月初旬にメールにての参加証（PDF）がダウンロードできる URL をお送りいたします。メールを受信したら速やかに参加証をダウンロードして保存してください。

5. 会員集会

・ 大会 2 日目（8/31 日）11：45～12：15、2 階【203】にて会員集会を開催いたします。学会員の皆様はご出席ください。

6. 懇親会

・ 大会１日目（8/30土）18：00～20：00、１階レストラン「SONES」にて懇親会を行います。当日も定員になるまでお申し込みを受け付けます。２階ロビーの大会受付にてお申し込みください。会費は 5,000 円です。

7. クローク・休憩室

・ クロークは、２階受付の横です。お預けの荷物は１日ごとにお引き取りください。利用開始は、受付開始時刻からです。１日目は 18：00、２日目は 16：00 終了です。
懇親会に参加される方は、荷物をお引き取りのうえ、懇親会会場にお越しください。なお、貴重品はお預かりできません。

・ ２階、４階のロビーのベンチを休憩場所としてご利用ください。大会で使用している多目的ホール、会議室も飲食可能です。

8. お弁当・お食事・飲み物

・ 本大会ではお弁当の事前注文はございません。昼食は各自でご用意いただくか、会議場内のレストラン、会議場付近の飲食店、コンビニエンスストアをご利用ください。飲み物は各階に自動販売機があります。

・ ごみ類は原則お持ち帰りください。

9. 書籍等の展示・販売

・ ２階の多目的ホールにて書籍などの展示・販売を行います。

10. お呼び出し・携帯電話等の使用

・ 会場でのお呼び出しはできません。また、会場内では携帯電話の電源をお切りいただくか、マナーモードの設定をお願いいたします。

11. コピー・印刷

・ 資料の印刷は、大会事務局では対応いたしかねます。館内管理事務所内にあるコイン式のコピー機か、付近のコンビニエンスストアのコピー機をご利用ください。あらかじめ予測される必要部数を各自ご持参いただく方が確実です。

12. 障害者用トイレ

・ 各階に障害者用トイレがございます。

13. 撮影禁止

・ 個人的な写真撮影や録画、録音はご遠慮ください。

14. その他

・ ご不明な点等ございましたら大会スタッフ（スタッフ用名札着用）に遠慮なくお尋ねください。

15. 交通機関

福岡国際会議場交通アクセス→ https://www.marinemesse.or.jp/congress/access/

※会議場の駐車場もご利用いただけますが有料となります（20分 100 円）、会場付近にもコインパーキングがありますので、ホームページでご確認ください。

自主シンポジウム関係者へのご案内

1. 時　間

・自主シンポジウムの時間は１時間 30 分です。運営は企画・司会者に一任されます。

2. PC 機器〈重要：必ずお読みください〉

① PC は企画者各自でご準備ください。接続端子は、HDMI もしくは VGA（D-15 ピン）です。

② ２日目の自主シンポジウム②、③は８時４５分から、その他の①、④、⑤、⑥は他のプログラムが行われていない時間帯であれば入室できますので、PC の接続確認をお願いします。

3. 配布資料

・自主シンポジウムにおいて配布資料がある場合は、企画者が 50～100部くらいご用意ください。

ポスター発表者へのご案内

1. 発表資格

①筆頭発表者および連名発表者ともに会員で、2025 年度の年会費を納入済みの方に限ります。

②筆頭発表者、連名発表者とも、大会参加費納入を 7 月 31 日（木）までに必ず済ませてください。大会参加費未納の場合は、発表取り消しとさせていただきます。

③筆頭発表者での研究発表は、お一人１題に限ります。連名発表者はその限りではありません。

2. ポスター発表の方法

①発表の認定

発表者は、発表時間中ポスターを掲示するとともに指定された時間在席し、参加者と質疑応答することにより正式発表とみなされます。

②掲　示

掲示用パネルは、横 90 ㎝×縦 210 ㎝です。掲示用パネルに番号が付いていますので、指定されたパネルにポスターを貼ってください。掲示には画びょう（会場にて用意）を使用してください。

会場は８時４５分から入室可能です。ポスター発表会場内の受付にて掲示用画びょうを受け取り、10時までにポスターを掲示してください。ポスターの最上部に発表題目、発表者氏名（筆頭発表者に〇を付ける）、所属を明記してください。約 2m 離れた所からでも全体が読めるように作成してください。

③掲示時間・発表時間

２日目の８月 31 日（日）10：00～14：00 にポスターを掲示してください。奇数番号の在席責任時間は 11：00～12：00、偶数番号の在席責任時間は 13：00～14：00 です。

④補助資料

当日資料を配布される方は、各自で必要部数をご用意ください。個人情報の関係等で回収が必要な資料は、発表者が責任をもって回収、処分を行ってください。

⑤撤　去

指定された発表時間内は、ポスターを掲示しておいてください。撤去されないポスターは、大会事務局の方で処分させていただきます。

大会基調講演

8 月 30 日(土) 13:30～14:30　会場:203+204

「自閉スペクトラム児への療育・教育の方向性」

講演者:本田 秀夫(信州大学医学部/日本自閉スペクトラム学会理事長)

司会者:大隈 紘子(山本病院/日本自閉スペクトラム学会九州支部長)

近年、自閉スペクトラム症(以下、「ASD」)を疾患モデルから変異(バリアント)モデルとして捉える方向へのパラダイムシフトが促進されている。「神経学的多様性」(Armstrong、 2011)、「神経学的種族」(Silverman、 2015)などと表現する考え方への共感的な立場を示す人たちが増加している。その背景には、障害の所在を個人の心身機能の異常のみに帰するのでなく、社会環境との間に存在する障壁に帰すると考える「障害の社会モデル」の考え方が反映されている。たとえば、以前は ASD の人たちの共感する能力は非 ASD の人たちより劣ると考えられていたが、非 ASD の人たちは ASD の人たちに共感できないことも指摘され、「二重共感問題」として問題提起されている(Milton、 2012)。本当は共感の問題は双方向的であるのに、数が少ない ASD の人たちの障壁のほうが大きくなる。したがって、ASD の人たちの社会生活の支障には、帰属する社会集団との違和感や、社会参加の困難さが大きく関連してくることになる。

近年、一部の ASD の人たちが、多大な努力によって特性を表に出さないようにすることが知られるようになり、「社会的カモフラージュ」(Hull、 2017)として注目されている。カモフラージュしている人たちは他覚的な症状の少なさと裏腹に内面での自己違和感や疎外感が強く、うつや不安を伴いやすい。園や学校では、集団運営の観点から「みんなと一緒に決められたルールや流儀に沿って活動に参加する」ことが要求されやすい。ASD の児童生徒は、知らず知らずのうちにこうした活動に過剰適応し、カモフラージュを身につけることを強要され、やがて違和感を覚えたりストレスを感じたりして登校意欲が下がることがある。

今後の ASD の子どもたちへの療育や教育には、多様性に配慮した共生社会への意識を基盤とした適切なインクルージョンが促進されることが求められる。文部科学省では、近年「多様な学び方」「個別最適の学び」などのスローガンのもとで個別の特性に応じた教育のプランニングの重要性を強調するようになっている。

この講演では、保護者や子どもに関わる業務に従事する人たちが個々の子どもの特性に応じた育児や教育を行うのが当然であるという価値観を共有し、来るべきユニバーサルデザイン化された育児と教育の文化へと視点を変換できるための療育および教育の課題について述べる。

大会企画　教育講演①

8 月 30 日(土) 14:45～15:45　会場:203+204

「発達障害への支援 ―これまでとこれから―」

講演者:市川 宏伸(一般社団法人日本自閉症協会会長/
日本自閉スペクトラム学会前会長)
司　会:本田 秀夫(信州大学医学部/日本自閉スペクトラム学会理事長)

発達障害が世に正式に認められたのは、平成17年に発達障害者支援法が施行されてからである。発達障害そのものは昔から存在していたにも関わらず、その存在は知られて来なかった。明治以降、日本は富国強兵、殖産興業のスローガンのもと欧米列強に伍すべく、右肩上がり勢いであった。その中で、障害のある者は、国に役立たない者とみなされ、盲聾身体障害者を中心に、時には人里離れた所で過ごすこともあった。盲聾身体障害者は、外見で障害の存在が分かったため、差別の対象になりやすかったが、反面では明治の頃から障害者団体として国に対して長年の活動を行ってきており、確固とした成果を上げてきている。一方で、外見で分からない発達障害者は直接的な差別の対象にはなりにくかったが、「普通の人間なのに、どうして出来ないのだ」と周囲から呆れられた。

平成10年前後に、「小学校低学年の授業がうまく行かない」ことが報告され、マスメディアが大々的に取り上げるに至った。この際には、〝発達障害児の存在〟が注目されたが、実際には教育する側の問題と考えられた。それらの児童は成長するにつれ、小学校高学年、中学、高校、大学(短大)と問題になり、現在は社会生活において問題になっている。職場の雰囲気を乱す、困った存在として、取り上げられることも珍しくはない。平成10年頃に10才ころであった児童は現在30才代後半に差し掛かっている。それ以前、40才代より上の発達障害者は、教育の場においては〝発達障害〟と言う概念は乏しく、「社会に適応できない人」、親は「育てられない人」とされ、結果として、福祉の世界で話題になっている、80・50問題との関連も示唆されている。

発達障害の本質を考えて行くと、厳密に分析することは難しく、既存の概念からずれているかもしれないが、素晴らしい業績を残す人も多いと考えるべきと思われる。ノーベル賞級の素晴らしい研究をする人や、絵画や音楽などで類まれな業績を残す人にも、政治家、官僚、実業家にも珍しくはないと思われる。〝発達障害は困った人〟と言う短絡的な発想でなく、〝通常ではできない発想が出来る〟人と考えるべきであろう。

大会企画　教育講演②

8 月 30 日(土) 16:00～17:00　会場:203+204

福祉分野における自閉スペクトラム児・者への支援
－全日本自閉症支援者協会の取り組み－

講演者:近藤　裕彦(社会福祉法人檜の里　あさけ学園　施設長／
日本自閉スペクトラム学会評議会)

司会者:寺山　千代子(日本自閉スペクトラム学会顧問)

1987 年 7 月、全日本自閉症支援者協会は(以下、全自者協と略す)、自閉スペクトラム症のある成人の支援を専門に行なう 8 つの福祉施設で発足しました(全国自閉症者施設連絡協議会)。本邦で初めての自閉症成人施設ができてから 6 年後のことです。当時、青年・成人期に達した自閉症のある人たちは「年長自閉症児」と呼ばれ、自閉症と言えばほぼ児(童)をさす時代です。もちろん法的な制度もありませんでしたが、何とか義務教育を受けてから行き場のない自閉症の人たちの親の有志(親の会)が全国各地で立ち上がり、子どもたちが大人として生き生きと暮らせる場所づくりの運動が盛り上がっていきました。

このような背景の中、次々と先駆的な自閉症成人施設が開設はしてくるものの、自閉症の大人の人たちに対するノウハウはどこにも見当たらず、それぞれの支援者が施設の内で暗中模索しながら日々の支援を頑張って続けていたように述懐されます。ですから、全自者協の集まりに出席すると、自分と同じ悩みや想いを抱き、同じ立ち位置に立っている人、あるいは話が分かってもらえる人が外部にも存在し、情報を共有できる機会を得られることがとても嬉しくて、話がはずむうちに好いヒントが思い浮かび、明日への活力が湧いてくる場となっていきました。

全自者協の創設以来の目的が「自閉症者の人権と生きるための発達保障、自立ならびに社会参加のための実践と研究を推進し、さらにこれに参画する者の研鑽と相互交流を促進することを目的とする」とあるように、実践に関する調査・研究や自閉症支援に特化した専門的な研修の在り方を根幹に据えてきたのもごく自然な流れと考えられます。

発足から 37 年が経ち、7 つの入所施設と 1 ヶ所の作業所で始まった協会は、一般社団法人格を取得し、名称も全日本自閉症支援者協会に改めました。会員の構成をみても、正会員 89 事業所、賛助会員 6 事業所、個人会員 16 名が加盟し(2025 年 3 月 31 日現在)、通所系や児童を対象とする事業所も含めて、自閉スペクトラム症の生涯支援にむけた職能団体へと発展しています。

今回の講演では、全自者協が長年にわたって取り組んできた、①年次研究大会、②発達障害スーパーバイザー養成研修、③最近の調査・研究活動など、自閉スペクトラム症の人たちの適切な支援を進めるための研鑽・研修の内容を紹介することにしました。この中で、本学会会員の皆様が職場内外の研修において少しでも役立つような情報を提供できれば幸いです。

大会企画　教育講演③

8 月 31 日(日)　9:30～10:30　会場：203

高等教育機関における発達障害学生の支援
―インクルーシブキャンパスに向けた多職種連携、そして新たな価値の創出へ―

講演者：田中　真理（九州大学人間環境学府教授）

司会者：川﨑　葉子（むさしの小児発達クリニック／
日本自閉スペクトラム学会評議員）

日本では全ての大学で合理的配慮の提供が法的義務となり（2024 年改正障害者差別解消法）、障害学生が個性を十分に発揮し、その能力を活かせる社会を構築することが大学には求められる。しかし、国際的にも身体障害等と比し発達障害学生支援体制は極めて不十分だと指摘され、障害を個人の属性ではなく社会の障壁としてとらえる社会モデルとしての発達障害理解は大きく遅れている。欧米に比し日本では発達障害人材の活躍機会が限られており、その経済損失は 2.3 兆円と試算されている（野村総合研究所,2021）。ここには、社会で活躍する発達障害学生の大学教育における社会的障壁が大きく関与している。一方で、日本では全大学の 85%に障害学生が在籍し、特に発達障害学生数はこの十年で約5倍に増え（日本学生支援機構,2023）、海外でも the Autism Tsunami と形容される劇的な増加を示し、発達障害学生支援は国内外共通の重要課題である（Koehler.L.J.,2018）。

上記の発達障害学生に限らず，高等教育機関では，多様な障害特性のある学生に公平な参加を保障するインクルーシブキャンパスの構築が求められている。障害は個人属性のみではなく，その多くが社会環境によって作り出されている。必要な環境の変更は社会全体の共同責任であるならば，多職種連携の観点は欠かせない。障害学生当事者への直接支援という「個人モデル」のみではなく，社会的障壁を低減するために周囲の環境全体を変える「社会モデル」に依拠し，周囲の一般学生や教職員へのアプローチも必須である。社会モデルに依拠することは，単に障害者を支援の対象とすることではなく，「マジョリティとは異なる世界の見え方を気づかせイノベーションを引き起こす存在」という視点をふまえ社会的価値観を問い直す根源的なテーマをも追求することとなる。そして，これは社会を再考する志向性へとつながるだろう。高等教育である大学の重要な使命は，このような根源的問いによって障害観・人間観・行動変容を発展させ，新たな価値を創出することである。

未来型の大学像において「社会モデル」へと大学コミュニティ全体の実質的な認識変容をめざし多様な学生をどのように包摂するかを検討するために、特に発達障害学生に焦点をあて大学での共生のあり方について考えたい。

8 月 31 日(日)　10:45～11:45　会場:203

特定分野に特異な才能を持つ ASD 児への新しい教育を目指して
ーSEISA アカデミーの取組―

講演者:松本　幸広(星槎大学客員教授、星槎アカデミー/
日本自閉スペクトラム学会理事)
司会者:前田　宣子(日本自閉スペクトラム学会理事)

特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援は、国の定める第 4 期教育振興基本計画(令和 5 年度から令和 9 年度)において具体的な目標として示されると同時に、内閣府総合科学技術・イノベーション会議(Council for Science, Technology and Innovation)においても、政策パッケージとしてロードマップ含めて計画が策定されている。これらの支援が国の重大な方針に盛り込まれることとなったのは、これまで議論さえ十分行われてこなかった当該分野の教育活動としての取り組みを、今後は積極的に進めるということが基本認識であるということを示している。

また、支援すべき当該児童生徒に関しては、2E(twice-exceptional)教育(二重の特別支援教育)の対象になる可能性が高いことも明らかになっている。実際、特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議の審議のまとめ(令和 4 年 9 月)を受け実施された、文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」において、令和 5・6 年に採択団体となった SEISA アカデミー(学校法人星槎)では、在籍している児童生徒の平均 IQ は 123 であるとともに、ASD の診断を受けているものが 6 割(10/17)である。診断は受けてはいないものの残りの児童生徒にも ASD の特長を見ることができる。そして、これら児童生徒は、入学前に不登校だったものが 8 割を超える(14/17)。

今回は、星槎グループによって令和 5(2023)年度から開設された SEISA アカデミーの実践報告を中心に、特定分野に特異な才能を持つ ASD のこども達を巡る学校教育の課題について取り上げる。

特定分野に特異な才能を持つ児童生徒は、学問、芸術、スポーツなどの分野で卓越した能力を発揮する一方で、学校の教育環境や人間関係に適応しにくい場合がある。学習内容のミスマッチ、興味関心の偏り、同世代との関係性のズレなどが要因となり、不登校につながるケースが実際見受けられる。また、ASD 含め発達障害の特性を併せ持つ 2E の児童生徒は、才能を活かす機会と学習環境の適応において大きな課題を抱えている。SEISA アカデミーに通う児童生徒も、学校の教育システムや人間関係に適応できず、不登校傾向にあったケースが多く見られている。特定分野に特異な才能を持つ 2E の児童生徒は、才能を伸ばす機会と学習環境の調整の両面で支援が必要なのは明らかだ。こうした児童生徒にどのような支援が必要なのか、教育制度の在り方も含めて議論していく。

自主シンポジウム

自主シンポジウム１　　**8 月 30 日(土) 15:00～16:30　会場:402+403**

福岡市における強度行動障害者への取組の現状と課題

ー福岡市障がい者行動支援研修を通した人材育成を中心にー

企画・司会:　池田 顕吾(東区第一障がい者基幹相談支援センター)
話題提供者: 森口 哲也(障がい者地域生活・行動支援センターか～む)
　　橋本 文(福岡市立発達障がい者支援センター)
　　小出 貴英(生活介護・短期入所らぁふはーと)
指定討論者: 倉光 晃子(西南学院大学人間科学部)
　　加藤 潔(自閉症者地域生活支援センターなないろ)

自主シンポジウム２　　**8 月 31 日(日) 9:30～11:00　会場:204**

見えにくい感覚特性に寄り添う支援の深化と推進

ー共生社会に向けたチーム・クレマチスの挑戦ー

企画:　宮﨑 仁(日本文理大学)
司会:　武井 祐子(川崎医療福祉大学)
話題提供者: 森戸 雅子(川崎医療福祉大学)
　　宮﨑 仁(日本文理大学)
指定討論者: 新田 悠晟(ダイワサイクル株式会社)
　　新田 麻由子(のぞみ福祉会 シード)

自主シンポジウム３　　**8 月 31 日(日) 9:30～11:00　会場:402+403**

当事者視点からの対話的支援を考える

ー逆 SST と自閉スペクトラム症支援の新たな形を模索するー

企画:　渡辺 忠温(一般財団法人発達支援研究所)
企画・司会:　山本 登志哉(一般財団法人発達支援研究所)
話題提供者: 大内 雅登(Care-Media Labo)
　　渡辺 忠温(一般財団法人発達支援研究所)
指定討論者: 山本 登志哉(一般財団法人発達支援研究所)

自主シンポジウム4　　**8 月 31 日(日) 13:15～14:45　会場:203**

自閉スペクトラム症に併発するカタトニアへの理解と支援

ー強度行動障害との関連性に着目してー

企画・司会:　米澤 巧美(社会福祉法人光友会　藤沢市発達相談支援センターにじのわ)
話題提供者:米澤 巧美(社会福祉法人光友会　藤沢市発達相談支援センターにじのわ)
　　伊藤 久志(アイズサポート・中京学院大学)
　　會田 千重(国立病院機構肥前精神医療センター)
指定討論者:村浦 新之助(上越教育大学大学院)

自主シンポジウム5　　**8 月 31 日(日) 13:15～14:45　会場:204**

不登校傾向のある ASD 児の指導の実践と高知能 ASD 児教育への新たな取り組み

ー通信制高校と SEISA アカデミー(無学年制学校)における取り組みー

企画・司会:　松本 幸広(星槎グループ)
話題提供者:森下 佳苗(SEISA アカデミー)
　　清水 勇紀(星槎国際高等学校)
指定討論者:坂本 路子(株式会社 MOCO　LITA＆COFFEE)

自主シンポジウム6　　**8 月 31 日(日) 13:15～14:45　会場:402+403**

ASD の特性理解に基づく支援の実践と支援者育成の展望

ー多様な支援現場から考える、ASD のある子どもたちへの理解と支援を担う人材育成ー

企画・司会:　岸本 和美(川崎医療福祉大学医療福祉学部)
話題提供者:角田 正博(広島市こども療育センター)
　　平木 真由美(NPO 法人ピュア)
　　岸本 和美(川崎医療福祉大学医療福祉学部)
指定討論者:西尾 大輔(厚生労働省　発達障害対策専門官)

ポスター発表

8 月 31 日(日)　P-1～P-36　会場:201

ポスター掲示時間:　10:00～14:00
在席時間:奇数番号　11:00～12:00　　偶数番号　13:00～14:00

P-1　地方議員 12 年の経験を経て
―認知行動療法と当事者活動による障害受容と社会適応へ―
ゆうのこ(仮名)(高松市健康福祉局障がい福祉課附属機関等委員, 香川県会計年度任用職員(高等学校職員))

P-2　成人広汎性発達障害当事者の就労継続の実践(II)
―「就労パスポート」を用いた復職と、復職後―
田名部　誠一(成人 ASD 当事者)

P-3　知的能力障害を伴う自閉スペクトラム症者に対する歯科外来看護師の学習支援の取り組みと課題
村井　裕子(北海道大学病院)
梅村　修江(北海道大学病院)
長谷川　千春(北海道大学病院)
池端　明美(北海道大学病院)

P-4　知的障害特別支援学校の児童生徒への教育活動に対する教員の認識
松山　郁夫(鎮西学院大学)

P-5　強度行動障害のある成人男性への札幌版集中的支援試行プログラムの実践報告
岩井　徹(社会福祉法人はるにれの里　札幌市自閉症・発達障害支援センター　おがる)

P-6　ASD 女性のライフストーリーから辿る化粧意識構築のプロセス
森　京花(北九州市立大学地域共生教育センター)

P-7　歯科領域における自閉スペクトラム症患者の個々の特性に合わせた行動療法とその効果
和田　鮎美(名古屋歯科保健医療センター)
伊藤　千世(名古屋歯科保健医療センター)
黒田　亜美(名古屋歯科保健医療センター)

P-8　住み慣れた地域で安心して暮らすために
―知的障害を伴う自閉症者　成人期壮年期の事例からの学び―
西尾 紀子（社会福祉法人 横浜やまびこの里）
岡田 孝弘（社会福祉法人 横浜やまびこの里）

P-9　成人期の自立、社会参加を目指した発達障害児の指導
―BWAP2に基づくライフスキルのアセスメントの活用とその検討―
康 一煒（株式会社 Kaien）

P-10　行動コンサルテーションを取り入れた職員研修
―障害者福祉施設に勤務する入職 3 年未満の職員における安定的な職務継続に向けて―
植田 隆博（国立大学法人九州大学 基幹教育院）

P-11　不登校傾向を呈した発達の気になる思春期の子どもをもつ保護者への
ペアレント・トレーニング普及に向けて
―地域の事業所と発達障害者支援センターとの共同実践―
岩橋 由佳（島根県東部発達障害者支援センターウィッシュ）
井上 雅彦（鳥取大学）

P-12　保育所等訪問支援事業による小学校移行支援の試み
―小学校の学び方を学ぶ 12 回・A（エース）くんもいる年長児クラスのアプローチプログラム考―
佐澤 智恵子（児童発達支援事業所アロット，尚絅学園短期大学部）

P-13　訪問看護師による ASD 児の意思決定支援と環境調整による登校支援の実践
―林間学校参加を契機としたポジティブな変化の記録―
齋藤 透（アップルパイ訪問看護ステーション）

P-14　児童思春期精神科患者へのコーピング行動支援
ーThe CAT-kit の気持ちの温度計を活用したセルフモニタリングを通してー
嶋田 菜緒（東京都立病院機構 小児総合医療センター）

P-15　自閉スペクトラム症者の成人期の日常生活場面における
経験内容の質と首尾一貫感覚との関連
泉田 さとみ（東北大学大学院教育学研究科）

P-16　相談機関を利用する自閉スペクトラム症の中高生の属性と保護者の主訴
長山 慎太郎（筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局，横浜市学齢後期発達相談室くらす）

P-17　自閉スペクトラム症の女性の QOL とカモフラージュ
砂川 芽吹（お茶の水女子大学）

P-18　R 君の積み木からしりとり遊びまで
―カナータイプの自閉症児との対話的支援が育てる主体的関係調整の力―
山本 登志哉（一般財団法人　発達支援研究所）
石黒 留美（（株）クラ・ゼミ　こどもサポート教室）

P-19　ASD 児が呈する勝ち負けへのこだわりに対する支援
竹中 正彦（一般社団法人あうん）

P-20　知的障害を伴う自閉スペクトラム症の子どもにおける
PECS を用いた要求の文構造拡大に関する一事例研究
松下 浩之（山梨大学大学院教育学域）

P-21　家庭支援の実施状況からみた受給者証返納者の実態分析
北田 健二（株式会社三葉）
李 月（株式会社三葉，龍谷大学）

P-22　ダイナミック氷山モデルを活用した支援事例の検討
―ABCDEF 分析シートを用いて―
金本 拓也（社会福祉法人ライフサポート協会，大阪人間科学大学）

P-23　AS 特性のある青年の自己決定力に関する研究
―AIR 日本語版の信頼性・妥当性の検証と関連要因の探索―
塚本 由希乃（札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる）
西尾 大輔（元札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる）

P-24　感情は行動に宿る
―自閉スペクトラム症当事者の語りにみる支援の可能性―
大内 雅登（Care-Media Labo）

P-25　アレキシサイミア傾向から見た感情調節課題時における前頭前皮質活動の検討
―ASD 児者・TD 児者を対象に―
古畑 僚（法政大学）

P-26　特別支援学校への ASD 児 6 年間の訪問支援からの考察
―多職種連携はどうあるべきか―
林 文博（児童発達・保育所等訪問支援事業所「ママとままま」）

P-27　チームアセスメントを活用したコンサルテーションが
チームの支援力向上に及ぼす影響に関する研究
坂井 翔一（北海道大学大学院教育学院，札幌市自閉症・発達障害支援センターおがる）

P-28　自閉スペクトラム症生徒とともに作成するソーシャルナラティブの効果の検討
金尾 智（下関市教育委員会）
岡村 章司（兵庫教育大学大学院）

P-29　ASD に出現する反転する動作模倣について
―知的レベル、経過における消長―
川﨑 葉子（むさしの小児発達クリニック）
猪野 民子（むさしの小児発達クリニック）
石田 理恵（むさしの小児発達クリニック）
桜田 晴美（むさしの小児発達クリニック）

P-30　医療機関を受診する前の保護者の心理的な変化と親子療育の役割についての一考察
―複線径路等至性モデルを活用した分析から―
糸島 千陽（就実大学　心理教育相談室）

P-31　通所支援事業所における親子療育の実践
―親（家族）による発達特性理解の重要性―
佐藤 慶一（特定非営利活動法人いちばんぼし　療育支援事業所てくてく）

P-32　家族変化の理解を促す取り組み
―自分年表・家族年表からピクトグラムへ―
よつば もこ（成人 ASD 研究会　一般社団法人 高槻ルーロー）

P-33　自閉スペクトラム症児における情動調整の特性と対人適応（Ⅰ）
―対人場面における情動調整方略の選択・影響の検討―
小原 義寛（広島大学大学院人間社会科学研究科）

P-34　就労・自立への移行期にある発達障害の若者を対象とした支援プログラム開発
中嶋 彩（信州大学, 一般財団法人 YOKA）
久保木 智洸（山梨県立大学）
本田 秀夫（信州大学）

P-35　視覚優位の児をサポートする人工知能の開発
―スマートフォンアプリケーションによる社会実装の試み―
塙 孝哉（東京大学医学部, 株式会社こどもめせん）

P-36　成人期の自閉症スペクトラム障害者への電話による支援（Ⅲ）
一山 幸子（西日本短期大学）

NPO 法人 日本自閉スペクトラム学会
第 23 回研究大会実行委員会

大会会長：　大隈　紘子（山本病院）
大会事務局長：楠　峰光（社会福祉法人玄洋会）
事務局長代理：髙原　朗子（桜岳学園）
事務局：　池田　顕吾（福岡市東区第1障がい者基幹相談支援センター）
小田　真美江（福岡市東区第1障がい者基幹相談支援センター）
山根　弘敬（地域支援センター・さくら）
松本　郁実（桜岳学園）
小山　千夏（桜岳学園）
山下　真実（糟屋子ども発達センター）
立野　翔太（桜岳学園）

2025 年 8 月

日本自閉スペクトラム学会第 23 回研究大会プログラム

編集　日本自閉スペクトラム学会第23回研究大会実行委員会
発行　第 23 回研究大会事務局
〒811-0201　福岡市東区三苫 8 丁目 105-1
社会福祉法人玄洋会　やまと更生センター内

学会事務局　特定非営利活動法人 日本自閉スペクトラム学会
〒273-0866　千葉県船橋市夏見台 3-15-18
TEL：047-430-2010
jimu@autistic-spectrum.jp
https://www.autistic-spectrum.jp/